

之に在つて特に苦心せられたと聞くに違はず、見た目に或る様式の把握を可能ならしめる。序言にも明言せられし如く田中松太郎氏の製版の苦心の結果は齊しく尙しとせざるを得ない。概説にあつては建築、彫刻、繪畫が主であり、小美術たる工藝は従であるが、兩氏が共に通説を採つて、特殊研究的に偏せられざりしにこの書の如何に謙虚の勞作たるかが知られる。

時代を追つて、古典に詳しく、近世に疎なるは、已むを得ない處であるが、近世は流派に即する取扱の簡にして要を得るが、古典時代にあつては作品の時代本位に敘說せられ系別本位ならざるを全體としての見地の統一を缺くが如くに思はれる。望蜀の嘆を敢へてすれば、海外との交渉に於て宋元の源流を詳しく解説中に圖示せらるゝにも係らず、六朝隋唐或は降つて明清の夫に疎に又明治以降の泰西との夫、先立つては安土桃山時代以降に於ける所謂切支丹美術以下の影響に觸るゝ處なかりしを憾みとしやう。

勿論、この著作が「日本的」なるものの闡明にあつて他にあらざる事が然らしめたる理由であり、現在の學術的水準より見てむしろ當然すぎる結果である。若し技術が許すならば、Handbookとして相應しい縮刷、更に歐文本の刊行あらば、この著作の提要たる意圖は完璧であると思ふ。日本に於ける歐文美術史の著書が、概説が一九〇〇年博物館編輯の佛文本、或は國寶帖英譯本の二種に留まる時、かゝる出版に是非とも歐文本を期待すべきを、強ちに時宜に適應せずと考へるのを當らずとし得やうか。茲にその願ひを以て妄評を了へやう。

(熊谷)

四六倍版、解説九七頁、圖版二九七頁九二〇圖、昭和八年九月二十五日 岩波書店發行、定價四圓五拾錢

## 美術研究所時報

美術懇話會は十月二十八日例會を開き、寺崎廣業の畫稿及寫生帳を主として展觀し、併せて「大佛開眼圖」及び「溪四題」をも陳列、又野田九浦氏の追懷談を聽いた。故人の遺した寫生帳は其の數多く、興味深いものがあるから、近く本誌上に紹介する豫定である。

## 寄贈新刊圖書

國四郎畫譜 國四郎畫譜刊行會 滿谷 國四郎氏  
東京帝國大學文學部考古學研究室蒐集品考古圖編一六 東京帝國大學文學部  
國寶全集 第五五、五六輯 文 部 省

佛教美術 一九 思想 一三八  
文學 一一七 博物館研究 六〇一一  
Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, vol. XXV, No. 10  
Gazette des Beaux-Arts, Septembre 1933  
Beaux-Arts, 37—40  
L'Italiano No. 22